

会員のページ

●子どもの心 「公平」

あるお母さんは、子育てをするとき、いつも気をつけていることがあります。そのことをお話しするには、お母さんが小さかった子供の頃のことを話さなければなりません。

新しい水が小川に引かれるころ、田んぼには紅紫色に染めたれんげ草のじゅうたんが一面に広がります。畑には、そら豆のさやが、もうはちきれんばかりに充分膨らんでいます。

「おうい、ほおら、初ものよ。」

そう言って、お母さんが、今ゆで上がったばかりのそら豆を入れたざるを持って、私達の部屋に入ってきました。すると、私と妹の前に、広告を裏にした白い紙をそれぞれ敷きました。そして、お母さんの手で、そら豆をひとつかみずつ、私と妹の前の紙の上に乗せました。

「はい、召し上がれ。」

そう言って、お母さんは台所の方に行ってしまいました。とたんに、

「頂きまーす。」 妹のはずんだ声がひびきました。と同時に、

「ちょっと待って。」

お姉さんの声がそれをさえぎるようにひびき渡りました。一瞬にして、そら豆の山を見比べたお姉さんは、なぜ妹の方が多いのだろう、姉なのだから当然自分の方が多くなければならないのにと、今にも、文句を言いたそうです。

「食べる前にいっしょに数えるからね。いいね。一つずついくよ。」

有無を言わず、お姉さんは、そら豆の山から一つずつ手にとって数え始めました。早く食べたい妹も、仕方なく、お姉さんの声に合わせて同時に一つずつ数えていきました。二人の声がひびきます。

「…11、12、……、……18、19……、… 21、最後よー。 22！」

妹の声も、ぴたりと止まりました。なんと、妹の方の数も一緒でした。お姉さんは、チェツと舌打ちしながらも納得し、いただくことにしました。妹も夢中で美味しくいただきました。……しばらくして、妹が、

「お母さあん、美味しかったよ。あのね、そら豆の数、お姉ちゃんとも同じだったよ。どうして？」

そうたずねると、お母さんは、

「はい、ふたりとも同じように大好きだからよ。」

と、にこにこしながら答えてあげました。ふうんと納得した妹の向こうで、お母さんの言葉に満足したお姉さんの笑顔が見えていました。

あれから二十数年、2児の母となった今、お母さんは、ひざの上に乗せるときにも、お話を聞くときにも、いつもかわりばんこにしてあげています。昔お母さんにしてもらった大切な気持ちを、子どもたちにも伝えてあげたいと、いつも考えているからです。